

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<書評> 四方田犬彦著 『先生とわたし』

著者	布村 育子
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	8
ページ	249-252
発行年	2008-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000798/



書評

四方田犬彦著

『先生とわたし』

布 村 育 子

NUNOMURA, Ikuko

「師とは過ちを犯しやすいものである」(p.205)。本書のこの言葉が、書評を書くきっかけであった、とは言い過ぎであろうか。

著者の四方田犬彦は、教師研究の一環として本書を記したのではない。つまり本書は、私の専門とする教育学の専門書ではない。したがって、私にこの本を書評する資格があるのかどうかさえわからない。ただこの言葉は、大学という教育機関に身をおき、教員養成に携わる私の日常を、相対化する迫力をもっていた。そして私は日頃、自明なこととして行っている「教育」を、本書の書評を書くという行為を通して、見つめなおしたいと思ったのである。

本書は、英文学者の由良君美と、そのゼミの学生であった四方田犬彦との関係を、四方田自身の回想という形で記された書である。その点から考えるならば、彼の著名な書『ハイスクール1968』(四方田：2004 (2008)) の、その後が描かれた書物と言えるかもしれない¹。

構成という観点から本書を説明するならば、5章に分かれており、その前後にプロローグとエピローグが付されている。プロローグでは、由良君美の計報を知った四方田の「生きているかぎり二度と彼と会うことはないだろうと、自分に言い聞かせてきたのである」(p. 7) といった思いが吐露され、本書には、かつて慕っていた「先生」と四方田との間に

起こった、ただならぬ出来事が記述されているであろうことを予感させる。その予感通りに、1章から順に、「先生」(由良君美)と「わたし」(四方田犬彦)の関係が、変容してゆくさまが記される。例えば由良が、四方田の著書に対する感想を、「すべてデタラメ」と一言記して、絵葉書を送付してくるといったエピソードなどが記されている (p.168)。

つまり読者は、プロローグで抱いた予感が、章を追うごとに、明確な言葉になって与えられていく快感を味わうことになる。だがその快感は、ひとつの謎によってすぐに打ち消される。「なぜ由良は、これほどまでに理不尽な振る舞いをしなければならなかったのだろうか」という謎である。四方田もまた、読者の思いに応えるかのように、その謎を、由良の生い立ちや由良自身の師との関係をさぐることによって、熱心に解き明かそうとする。エピローグで四方田は、由良の墓前で、「すべてが終わったんだ」とつぶやく自身の姿を描写する (p.238)。それは、謎が解き明かされた印でもある。読者の多くもまた、彼のそうした「感傷」(p.238) に共鳴し、本を閉じる頃には、自分自身の「先生とわたし」を、彼らの関係に照らし合わせながら読んでいたことに、気づくのではないだろうか。

また、4章と5章の間には、「問奏曲」と題した文章が差し込まれている。冒頭で私が示した言葉は、この「問奏曲」に書かれていた言葉である。先に、

キーワード：師弟関係、生成としての教育、教師論

Key words : the relationship between teacher (master) and student (disciple), generative education, teacher theory

由良の理不尽な振る舞いを「謎」と表現したが、「間奏曲」には、その謎を解くための重要な視点が示されている。したがって、この「間奏曲」について真っ先に述べたいのだが、今はまず、私が多くの示唆を得た、由良君美の教育について言及したい。

由良君美の教育。これをもう少し詳しく述べるのならば、四方田が、由良の教育を記述することで浮かび上がらせる、「教育が成立するための条件について」、と言ってもよいかもしれない。

昨今、根拠なき若者批判が行われていることに、異を唱える書物が増えてはいるが²、教育現場では、大学生の学力低下、質の低下を学生個人の問題であるかのように述べ、それゆえ授業が成立しないと嘆く教育者も多くいる。私はそのように、教育が成立する条件を、学習者側のみに求める議論には賛成しない立場である。

このことをもう少し詳しく語るために、教育学の知見をひとつ紹介したい。矢野智司は、社会学者作田啓一の論を援用しながら、教育を、「発達としての教育」と「生成としての教育」に分けて論じている（矢野：2000a、2000b、2008）。「発達としての教育」とは、デュルケムの「社会化」の視点が示すように、その人物が生活している社会（共同体）に生きるための教育であり、戦後の学校教育のイメージが与えられている。

これに対して「生成としての教育」とは、「発達としての教育」が目指す教育目的、またはその教育を公教育として支持している社会（共同体）の規範を揺るがし、否定してしまう可能性をもった教育を指している。例としては、ソクラテスや、ニーチェのツァラトゥストラの教育があげられる³。それぞれの教育における教師は、「発達としての教育」が「世俗内個人」であるのに対して、「生成としての教育」の教師は、共同体の外部から現れる「世俗外個人」である。

私には、この矢野の知見、「生成としての教育」の教師が、由良の存在と共鳴しているように思われる。事実偶然にも由良は、東大の教授ではあるが、東大出身ではなかった。つまり由良は、東京大学という「共同体」の中に、「世俗外個人」として、四方田ら学生の前に現れたのである。

由良の教育が記述されている箇所は圧巻である（p.19-30）。その様子を四方田は、同級生の言葉を借りて、「骨董屋の丁稚が最初に名品ばかりを見せられるようなものだった」（p.22）と綴っている。四方田もまた、彼の授業に参加することで、「大学に入学して初めて知的な充実感を体験した」と記している（p.30）。つまり由良は、学生たちに今までに経験したことのない世界を披露し、その世界に踏み込みたいという動機付けさえ与えたのである。

この由良の教育は、同じ大学教員として生きている私の立場を相対化し、羞恥の思いを感じさせるのに十分であった。かつて私も自分の先生から、「大学教育の目的は、価値の転換である」と教えられた。私もその先生の教えを引き継ぎ、「高校までの自分の考えを確認して安心するために大学教育があるのではない」と教えようとしている。だが私と、そうした先生たちとの決定的な違いとは、学生に学問への動機付けを与えられるような、圧倒的な知識を持っているとは、言いきれないところにあるのだろう。

しかし、私が得たものは、羞恥心だけではなく、私は由良の教育から、「教育を成立させるための条件」の証左を得たといってよい。つまり大学教育とは、「生成としての教育」の磁場でもあり、そこにおける教師とは、由良君美のように圧倒的な知識を持っていることが第一条件になる、という事実である。さらにその「知識」とは、「共同体」で生きる力、「知恵」のようなものではなく、純粋に学問的な知識であり、その知識が学習者との間に介在した時に、教育は成立するという事実である。

四方田は別のところで、自分のこれまでの大学教員としての経験をふりかえり、「自分ははたして知を解放のために語っているのだろうか」と自問している（四方田：2008、p.74）。この言葉に表れている彼の教育観とは、教育が現状維持の行為ではなく、現状打破の力を持った行為であるというものではないだろうか。彼のこの教育観は、先に援用した教育学の知見においては、「生成としての教育」と響きあう。この教育観の源泉には、由良から受けた「教育」があったと私は考えている。

では次に、先に述べていた「間奏曲」について触

りたい。

ここで四方田は、2つの書物を紹介している。ひとつは、スタイナーの『師の教え』(George Steiner: 2003)、もうひとつは、山折哲雄の『教えること、裏切られること』(山折: 2003)である。いずれも「師」について考察された書物である。特に私は、四方田自身も「耳元から離れない」(p.214)と称したスタイナーの言葉、「師とは過ちを犯しやすいものである」という言葉に拘りたい。

四方田が訳したその箇所を引用しよう。「われわれは、師とは過ちを犯しやすいものであるということを見てきた。嫉妬、虚栄、虚偽、背信が、ほとんどさげがたく忍び寄ってくる」、「だが、希望を新たにし、完璧さを欠いた驚異こそが、われわれを人間の尊厳へと導いていくのではないか」(p.205)⁴

四方田は5章では、このスタイナーの言葉を由良に向け、しかし「過ち」という強い言葉を避け、「師とは脆いものである」と表現し、由良が四方田に行った理不尽な行動の謎が、「師の脆さ」にあったことを解いたのである。

私は日頃、教員養成に携わる立場である。現在私と同じ立場にある大学教員は、制度的には、文部科学省が示す教師像を無視できないような状況にある。例えば、平成17年度の文部科学省の答申において示された教師像を紹介するならば、「総合的な人間力」をもつような人物を教師として育てるのが、大学の教員養成に携わるものの仕事をして位置づけられている⁵。

むろん答申は、大学教員の資質について述べているのではない。あくまでも初等中等教育の教師像を述べているのである。しかし、大学において教員養成を行う以上学生は、「総合的な人間力」を語る大学教員の「総合的な人間力」を、意識せざるを得ないだろう。ゆえに、教員養成に携わる教員は、文部科学省の述べる教師像を、自らにも科すことが、暗黙のうちに求められているといってもよい。

私がスタイナーのこの言葉、あるいは、四方田が「変奏」(p.215)した「師とは脆いものである」との言葉に拘りたいのは、私自身にも求められ、そして、学生たちにも教えるべきとされる「教師像」と、彼らの言葉が、まったく別の視点から語られている

ことに気づいたからである⁶。

もう少し具体的に述べよう。文部科学省の示す教師像とは、完璧な人間像として述べられている。しかもその完璧さとは、「発達としての教育」が目指す教育目的、またはその教育を公教育として支持している社会(共同体)における完璧さである。この「完璧な」教師像のみを、学生が素朴に信じていたとすれば、その教師像と乖離する教師を、完璧な人間に照らした「欠格点」から評価せざるを得ないことになる⁷。あるいは私のように、教員養成に携わるものが、この教師像を絶対的な教師像であると素朴に信じていたとすれば、教師になろうとする人間を、「教師の資質」といった曖昧な観点から評価せざるを得ないことになる。

先に私は、教育が成立するための条件、とくに「生成としての教育」が成立する条件を、「教師の側の圧倒的な知識」であると述べた。しかし「完璧な人間」としての教師像が、教育を成立させるための第一条件となった場合には、「教育」が、教師の人間性(共同体を維持させるための人間性)とセットでしか語られなくなることを意味する。それは言うまでもなく、教員養成の現場から「生成としての教育」を排除することを意味する⁸。

だが、四方田のように、「師とは脆いものである」という言葉から出発し、それでも「完璧さを欠いた驚異」を師に認めることができたならば、教育を、教師の人間性とは別の軸で語ることができるだろう。それは、教育の現場に、「世俗外個人」としての教師が登場する場を用意し、「人間関係」(前掲 山折: 2003)という言葉に回収されてしまう師弟関係を、再び教育の現場に復活させる行為につながるのではないだろうか⁹。

四方田自身は5章の後半で、「脆い」教師像を、積み掛けるように自分自身にも突きつける。「はたして自分は現在に至るまで、由良君美のように真剣に弟子に向かって語りかけたことがあっただろうか。弟子に強い嫉妬と競争心を抱くまでに、自分の全存在をかけた講義を続け、ために、自分が傷つき過ちを犯すことを恐れないと言う決意をいただいていただろうか」。(p.218)

私はこの言葉に再び羞恥する。私が教員養成の場

で学生に求め、求められてきた「教師像」は、完全に覆されたように思える。「師の脆さ」を、「生成としての教育」の磁場で、捉えなおさなければならないと真に思う。

すなわち、この『先生とわたし』とは、私にとっての「生成としての教育」の師といえる書物なのであろう。

謝辞：本書は、本学職員の藤田敦氏に紹介していただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

注釈

- 1 四方田には、『『ハイスクール1968』後日譚』というエッセイがある（四方田：2005）。だが彼のハイスクール以後の回想という観点から考えて、このような表現を用いた。
- 2 例えば、浅野智彦編『検証・若者の変貌』（2006年）、渡部真『現代青少年の社会学』（2006年）、広田照幸編『若者文化をどうみるか？』（2008年）などが挙げられる。
- 3 紙幅の関係で詳細については述べられない。矢野の原書を参照されたい。また亀山・麻生・矢野編『野生の教育をめざして』（2000年）には、各執筆者がデュルケムの社会化に対して「超社会化」の可能性を論じている。なお、「超社会化」との言葉はないが、宮台真司の『「脱社会化」と少年犯罪』（2001年）にも、「脱社会化」と称して、同様な視点を読むことができる。
- 4 スタイナーの『師の教え』は翻訳本がない。原書“Lesson of the Masters”（George Steiner：2003. p.184）を参照されたい。
- 5 「総合的な人間力」とは、「豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくこと」である。文部科学省のホームページを参照されたい。
- 6 ここで私は、文部科学省が示す教師像と、「スタイナー—四方田」が示す「師」の姿との乖離を指摘し、前者が現実を反映していないなどといった凡庸な議論を行いたいのではない。彼らの示した師の姿とは、権力関係を結ばざるをえない、弟子、生徒、学生にとって、知っておくべき重要な観点を示していると考えたいのである。しかし、「現実の反映」という点から言えば、文科省の述べる「総

合的な人間力」が果たして現実の日本社会のあらゆる社会層を射程にして述べられているのかどうかは疑問である。

- 7 例えば芥川龍之介の小説『毛利先生』（1919年）にはこのような状況がうまく表現されているので参照されたい。
- 8 「問奏曲」で四方田が紹介した山折哲雄の書の言葉、「師弟関係という垂直軸を無視し否定することによって、人間関係という横並びの水平軸がいつも不安定にゆれ続けることになったのである」（山折：2003、p.28-29）が、ここで述べている事柄と重なり合うと考えている。
- 9 誤解が生じないように念のために述べておくが、本書、あるいは前掲矢野の文献を読めば明らかのように、ここでいう「師の脆さ」とは、例えばセクハラ、アカハラといったような、師のどんな行為をもゆるすべきであるという類のことを述べているのではない。四方田もまたそのような議論をするために本書を書いたのではない。

主要文献

- | | | |
|----------------|-------|--|
| 四方田犬彦 | 2005 | 『「ハイスクール1968」後日譚』
渡部真編「モロトリアム青年肯定論：現代のエスプリNo460」
至文堂 |
| | 2007 | 『「先生とわたし」刊行記念 対談 巽孝之×四方田犬彦 師弟とはなにか』『波 451号』新潮社 |
| | 2008a | (2004)『ハイスクール1968』新潮社文庫（新潮社） |
| | 2008b | 「孩子王余話」『現代思想 vol.36-4』青土社 |
| 矢野智司 | 2000a | 「教育の〈起源〉をめぐる覚書」
亀山佳明ほか編『野生の教育をめざして』新曜社 |
| | 2000b | 『自己変容という物語 生成・贈与・教育』金子書房 |
| | 2008 | 『贈与と交換の教育学』東京大学出版会 |
| 山折哲雄 | 2003 | 『教えること、裏切られること』講談社現代新書 |
| George Steiner | 2003 | “Lesson of the Masters” Harvard University Press |